

上越市立高志小学校公開研究会（'06.11.8.）研究紀要『超研究開発 そうい』所収
高志小学校の生活科の特色

上越教育大学 木村吉彦

上越市立高志小学校低学年では、生活科を教育課程の中核に据えた実践が行われている。そこでは、生活科学習指導の本来の在り方や可能性が実践的に見えてくる。

1．教師の役割・子どもの課題

単元選択の大方針（例えば「野菜栽培」や「動物飼育」を取り上げること）は教師が決めるが、学習の中身は子どもが決める、というのが生活科の原則である。このことを前提に、高志小では、子どもへの声掛けは抽象的に情意面に訴え（例：「畑さんの喜ぶことをしよう」「ヤギさんの喜ぶことをしよう」）、具体的な活動内容は子どもに考えさせ、決めさせ、行動させる（「草むしり」「石拾い」「ビニール拾い」「餌やり」「散歩」等）ことにしている。これは、**生活科の学習指導の本来の在り方である**。「学習の中身は子どもが決める」とは、子どもの主体的な意志決定を認め、活動内容を子どもに任せる、ということの意味する。「子どものもつ内なる力を信じ、その子どもの力を「引き出す」ことが教師の仕事の本質である」ということを高志小の先生方は理解している。

2．体験（活動）と作文—文字学習をはじめとした「必然性のある学習」

「充実した体験をしたあとの子どもは書きたくなる」、これが高志小学校の体験・活動と子どもの文章表現力（国語力、と言ってよい）の基本的な関係である。1年生の時から「活動したら書く」ことを当たり前のこととして子どもたちは身に付けて行く。これは、その後の学習に大きな影響を及ぼす学習習慣の獲得である。思い切り体を動かしたあと（例えば、ヤギと思い切り走ったあと）、教室で作文を書く子どもたちの姿には集中力がみなぎっている。大好きなヤギさんとの活動を子どもは書きたくてしょうがないのである。

また、自分の行った活動や体験を作文に書きたいが故に子どもたちが字を覚えるということも高志小学校の生活科及び国語教育の大きな特色である。子どもたちは書きたいから字を覚えることになり、これはとても身に付く学習の方法である（「あいうえお順ではない文字指導」）。「書きたいから」「～～したいから」、そのために勉強するというのは、「何のために勉強するのか」という多くの者が抱く疑問への答えとなっている。

逆に、作文を書きたがらなかったり、書けない子どもがたくさんいるということは、「書きたくなる」体験を提供できなかった教師の責任である、と高志小では考えられている。作文が、評価の中心であり、教師の教育活動のよしあしを測るバロメーターともなっている。

3．他教科等との関連 —生活科の可能性の広がり

2．で国語との関連を例として挙げたが、高志小学校低学年では、生活科を学級経営の中心にして、国語や図工、音楽などの教科や行事に関連させている。これは、生活科の可能性の大きさを実践的に示してくれている。活動は生活科で、表現方法は他教科で、ということである。生命を扱う点で道徳とも十分に関連させることができる。また、数え方や表やグラフにして表現する活動を考えれば、算数の出番も必ず作れる。

自由な表現方法が可能な大きな理由の一つに、生活科では唯一絶対の正しい答えというものがないことがある。生活科は「間違ふ」心配がない。生活科は、子どもの自己表現力を高めるのにもってこいの教科だと言える。

また、自由な意見交換の場の設定は、学級経営上重要である。これまでとこれからの活動の

在り方を巡って自由に話し合えるには、担任教師と子どもたちとの信頼関係、子ども同士の信頼関係が不可欠だからである。先生やクラスの友達の前では自分の思ったとおりのことを話してもいいんだ、という安心感が子どもの中にあることで初めて、活発な学級活動や話し合い活動が実現できる。

このように、高志小の実践から、生活科は低学年における他教科・領域等すべての分野と関連させた学習が可能であることがわかる。やはり、生活科の学力は「全人的なもの」であることを確信する。

4．日常生活の一部としての生活科の活動—生活科を生活化する

朝の会や帰りの会で子どもたちは動物や野菜のことを発表する。動物飼育・野菜栽培が子どもたちの生活の一部として組み込まれている。多くの子どもたちは、登校すればすぐ飼育小屋や畑へ行って、ヤギや野菜の様子を見る。昼も放課後もである。動物や野菜の世話が日常生活上の課題であり、その世話をうまく行うことがそのまま日常生活上の課題解決に該当する。生活（科）のネーミングの意味がそのまま高志小の生活科に生きている。

5．擬人化～対象への愛着形成のために

「～さん」付け

高志小の先生方は、意図的に「ヤギさん」「畑さん」「野菜さん」と呼んでいる。子どもと対象（ヤギ・野菜等）との精神的距離を縮めることがねらいである。対象との精神的な距離によって、その後の活動が違って来る。最初、対象を「ヤギ」「畑」と「よび捨て」で呼んでいた子どもたちも、先生が常に「さん」付けで呼び、語る姿を見聞きし、自然に自分から「ヤギさん」「畑さん」と呼ぶようになる。従って、この「さん」付けも重要な学習環境設定である。私は、「さん」付けは、（低学年の）子どもが対象に愛着を持つための一つの有効な手立てであると考え。愛着の度合いが大きく、子どもたちが対象にこだわればこだわるほど活動は継続し、子どもの考えや気付きもひろがり、かつ深いものになって行く。

声を聴く

高志小では、ヤギや畑や野菜の「声を聴こう」という指導がなされている。私は、子どもたちが畑や野菜の声を聴く活動を「自己内対話」と名付けている。子どもたちは、心の中でもう一人の（ヤギや畑・野菜になりきった）自分と対話しているのだと思われる。これが対象（野菜等）へのさらなる愛着を育てているのである。ところが、ある時一人の2年生女兒がそっと耳打ちしてくれた。「本当は、わたし、野菜さんの声が聴こえたことはないんだ、先生には聴こえたふりしてるけど。」と。1年時には何の抵抗もなく（そういうものだ）受け入れていた子どもたちも、2年生になれば客観的な思考力も芽生え、「擬人化」よりも「現実」の事実からものを考える子どもが出てきて当然である。教師は、一人一人の思考力の発達を見極め、画一的なワンパターンの指導に陥ってはならない。

6．独自の「評価規準」の設定—「学びの質」の変化をより客観的な見取るために

高志小では独自の「評価規準」を設けて子ども理解を共通化できるようにしている。「評価規準」とは、「教育目標を子どもの姿で示したもの」のことである。例えば、動物飼育の場合「初級：動物に自分のしたいことをする。中級：動物のことを考え、自分のできることをする。上級：動物のしたいことに合わせ、自分のすることを決める。」というように3段階で子どもの「育ち」を見るようにしている。ここには、子どもが「自己中心性」から離れ、「他者（対象である動物のためにという）意識」をもって生きるという成長の姿がはっきりと見て取れる。このような「育ちの方向性」を確かめながら、高志小の先生方は子どもを理解し指導している。